

# 保育の質を高めるための研究指導のあり方 —記述を用いた対話による振り返り—

重村美帆<sup>\*1</sup>・弘中陽子<sup>\*1</sup>

(<sup>\*1</sup>宇部フロンティア大学短期大学部保育学科)

Research guidance to improve the quality of early childhood education

— Reflection through dialogue by use of the episode description —

Miho Shigemura<sup>\*1</sup> and Youko Hironaka<sup>\*1</sup>

(<sup>\*1</sup>Department of Nursery Education, Ube Frontier College)

日々の保育活動を計画に基づいて実践し、省察を行い、次の保育活動へ活かしながら高めていく。そうした保育づくりが望まれる今日において、保育の質を高めるための園内研修の取り組み方は確立されているとは言えない。保育研究者がこうした園内研修に関わることは、保育者が感覚的保育から思考的保育へ意識を変容させていく上で、協働的な立場となり得ると考える。そこで、保育研究者の園内研修に対する研究指導のあり方について、研究指導の実践から明らかにした。保育者の意識変容となる発言をもとに、研究指導の見直しを行った結果、記述を用いた対話による振り返りの場を保障する重要性が示唆された。

今後は、限られた体制や時間の中で、保育者自身が自らの保育づくりを楽しみながら実践し、振り返りを行う研修プログラムの構築や保育研究者と保育者との協働体制を確立していく必要があると考える。

**キーワード：**保育づくり、保育者、子ども、園内研修、研究指導、保育者の意識変容

## 1. 研究目的

平成20年に保育所保育指針が改訂され、保育現場では、保育の質を高めるための取り組みが盛んに行われるようになった。様々な外部講師を招いた研修会や複数園での共同研究等、その取り組みは多岐に渡る。

しかしながら、実際には多くの園が待機児童解消のための定員増加や保育者不足等の問題を抱え、多忙な日々の中で、園内研修や保育研究に集中して取り組むことは、体制的にも時間的にも厳しいことが窺える<sup>1)</sup>(川崎：2015：47)。また、そうした多忙な日々において保育の質を高めるための園内研修の取り組み方は、必ずしも確立されているとは言えない。

園内研修において、現場保育者が求めているもの、それは自らの保育の質を高めていくことである。感覚的な保育世界に生きる保育者が思考的保育を獲得し、保育の質を高めていくためには、捉えるべき「質」を

発見する道筋が必要となる。その発見への道筋を協働的に築いていく役割が保育研究者にはあると考える。

日本における保育の質研究は、どのような取り組みが挙げられるのだろうか。保育実践の「質」を問う、評価する方法としては、質尺度を用いた評定による客観的な研究方法やカンファレンス等を用いた保育者の意識変容という主観的な研究方法による質の向上の検討が挙げられる。さらに、保育の質研究の展望と課題について秋田ら(2007)は、「保育現場においては、質尺度を利用するよりも、主にカンファレンスや研修を通して保育実践を省察することで、『質』の向上を問うてきたと言える」と述べている<sup>2)</sup>。これは、保育の質研究においては、保育者のものの見方や考え方といった「保育者のあり方」を保育の質と位置づけているものが多いからであると言える。

こうした多くの先行研究から、保育実践における保育の質の捉え方は未だ定まっておらず、何をもって質

の向上とするのかについても試行錯誤の段階であると考えられる。

そこで、本研究の目的は、保育現場の状況に合わせた研究指導の実践報告から保育者の意識変容に着目し、保育の質を高めるための研究指導のあり方を明らかにする。

## 2. 研究方法

本研究の研究方法は、保育の質を高めるための取り組みとして、計画→実践→振り返り→改善というPDCAサイクルを活用し、研究指導の過程で得られた保育者の発言をもとに、研究指導の見直しを行った。

## 3. U支部への研究指導の概要

A県では、毎年保育大会を開催しており、県内数ヶ所の支部が研究発表を行っている。平成28年度のA県保育大会で研究発表を行うこととなったU支部には、公立・私立合わせて29園の保育園がある。

今回の県大会に向けた研究の取り組みは、主任保育士会が中心となり進めていくことになった。事前に29園で研究テーマの案を出し合い、子どもの運動について取り組みたいという要望があがった。そこで、最終目標となる県大会に向け、研究の段階的な方法を提案し、現場保育者との対話による取り組み方を探っていくことにした。研究テーマは「からだを動かす遊びを楽しむ子どもの育ち～幼児期運動指針を軸に～」で取り組むこととなった。

## 4. 研究結果

### 4-1. 研究指導①

- 平成25年6月 主任保育士会（29園）を中心とした研究テーマの選定を行う。
- ・県大会の概要や発表に向けての研究方法について話し合いを行う。
- ・U市保育士研修会で「幼児期運動指針を読み解く」の講話による研修を行う。

幼児期運動指針とは、平成24年3月に文部科学省が策定したものである。策定に向けての事前調査研究において、幼児期における体を動かす機会の減少傾向がうかがえる結果であったことから、都市化や少子化、

生活スタイルの変化等が、幼児期からの多様な動きの獲得や体力・運動能力に影響していると述べられていた<sup>3)</sup>。

こうした子どもの運動に関する課題は「何もないところで転ぶ子どもが増えた」「すぐに疲れたと言う子がいる」等、U支部においても同様に抱えており、子どもの体力を向上させるための運動遊びについて関心があることが窺えた。

そこで、子どもの体や運動能力についての理解を深めるために、幼児期運動指針を読み解くことから始めた。人が生涯にわたって健康を維持し、積極的に活動に取り組み、豊かな人生を送るためには適度な運動に親しむ習慣をもつことが大切であること、また、その習慣によって育つその後の子どもの運動能力の発達について解説を行った（図1）。

U支部では、現場の課題である子どもの運動に着目し、子どものからだの育ちをはぐくむことを研究の柱とすることになった。さらに、子どものそうした育ちは、保育者の働きかけによって促されていくという立場から、子どものからだの育ちをはぐくむ保育づくり（遊び）を実践し、からだを動かす遊びをつくる保育者の意識変容も併せて研究の柱とした。

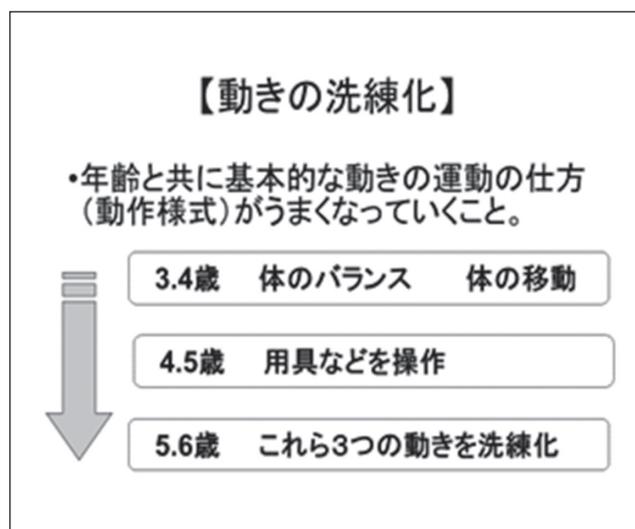


図1 発達段階毎につながる動きの洗練化(著者作成)

### 4-1-1. 保育者の意識変容 ステージⅠ

幼児期運動指針を軸に進めていく中で、乳児クラスの保育者から「0歳児では運動は難しい」「乳児クラスの取り組み方がわからない」といった声があがった幼児期運動指針には描かれていない乳児期の子どもに対する保育づくりを、どのように考えていくのかにつ

いて意識が向き始めた発言であると捉えた。

そこで、0歳児の原始反射もからだの動きの発達と捉え、保育所が持つ特性である乳幼児期の一貫した子どもの育ちを視野に入れた保育づくりを行うよう研究方法を模索していくこととなった。特に、乳児期の保育者の戸惑いとなっていた「運動遊び」という言葉は使用せず、0歳児のからだの動きを含めた「からだを動かす遊び」という言葉に置き換え、保育づくりにつながるようにした。

#### 4-2. 研究指導②

- 平成 25 年 9 月～12 月 研究委員会発足。県大会に向けた研究スケジュールと研究委員の役割確認を行う。
- ・年齢別からだを動かす遊びの年間指導計画様式を提案し、保育者が作成したものを指導する。
- ・U市保育士研修会「保育実践報告書の書き方」の講話による研修を行う。
- ・保育実践報告書及びからだを動かす遊びの記録報告書についての説明を行う。

##### 4-2-1. 研究委員会発足

29園という多くの園で協同して取り組む研究活動となるため、研究委員会を発足した。保育者側の取り組みにおける不安や要望等の声が届くよう、各園から1名ずつ研究委員を選出し、研究指導者と研究主体である保育者との相互関係（対話）をつくることを目的に委員会を組織し、運営していくことにした（図2）。

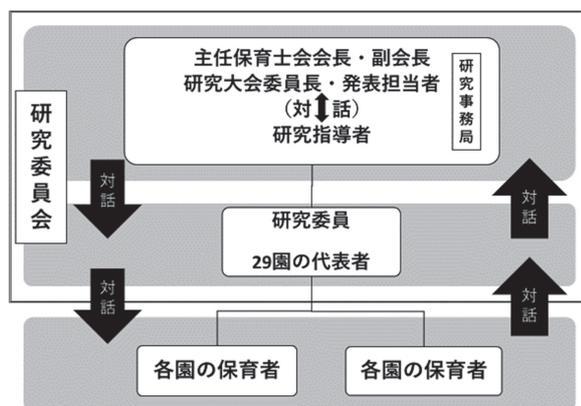


図2 研究委員会組織図（著者作成）

のが指導計画である。出来る限り日頃の手順と同じ方法で取り組むことで、日常の保育づくりをより意識していくことができるようにした。

通常の年間指導計画は、それぞれの園において独自に作成されている。しかし、今回の研究を統一した視点で行う必要があったため、からだを動かす遊びに特化した全園共通で活用する年間指導計画を年齢別で作成するよう提案した。

##### 4-2-3. 保育者の意識変容 ステージⅡ

特に、0歳児は月齢差があるため「期毎の発達段階をどの月齢に合わせて計画を立てればよいかわからない」という声があがった。自らが担当する乳児クラスの子どもたちをどのように捉え、計画に織り込んでいくのか、個と集団の発達についてそれぞれ意識が向かった発言と捉えた。

そこで、月のまとまりではなく、子どもの月齢を期と捉えた計画を立案するよう提案した。さらに、保育活動となるからだを動かす遊びは、個の遊びと集団の遊びに分類し、より保育者自身がつくる保育実践と子ども自身がつくる遊びとに意識が向かうよう配慮した項目立てを行った。計画様式は、9項目で構成した（図3）。

期	I 期（ 月）	
子どもの姿		
発達段階		
ねらい		
内容		
からだを動かす遊び	個の遊び	
	集団のあそび	
☆保育士の援助 ◎環境構成		

図3 からだを動かす遊びの年間指導計画様式（著者作成）

##### 4-2-2. 指導計画（Plan）

保育づくりの際、現場保育者が最も活用しているも

4-2-4. 保育実践と保育記録 (Do)

からだを動かす遊びの年間指導計画を基にして、日々の保育活動にからだを動かす遊びを盛り込み実践していくことになった。それと共に、保育活動を通した子どもの育ちと保育づくりを通した保育者の育ちの両面を探るため、保育実践後と観察後の2種類の報告書による記述を行うことにした。

当初、両者の育ちがより解るよう報告書を月毎に提出する提案を出したが、日常の業務に加えた研究活動への負担の声があがったため、現場で可能な形を話し合い、期毎(年4回)の提出とした。

《保育実践報告書》

この報告書は、自らの保育実践を実践前・実践中・実践後と継続した視点で意識化することを目指した記録である。保育実践後の記述にすることで、実践前と実践中において、子どもの様子や自らの保育方法に意識が向かうよう様式の項目立てを行った。

特に、項目【ねらい】においては、山口県のチャレンジやまぐち「家庭・地域・学校で楽しく取り組むプログラム」(2014)で挙げられていた6つの力(バランス・力の入れ方・体の移動・体のやわらかさ・物の操作・つづけて動く)に遊びを分類することにした<sup>4)</sup>。

保育づくりをする際、具体的に育てたい子どもの力を遊びごとに分類することを通して、保育者自身の活動へ取り組む姿勢や子どもを見る視点となるよう留意した。報告書の様式は、11項目で構成した(図4)。

保育実践報告書 No.			
実施園【 保育園】 実施者氏名( )			
実施日時		実施クラス 及び人数	
主な活動		実施場所	
【ねらい】 (運動能力)	環境構成(写真・図)		
時間	活動内容 (写真・図)	子どもの姿	保育士のかかわりや 援助
【反省・評価】			

図4 保育実践報告書様式(著者作成)

《からだを動かす遊びの記録報告書》

この報告書は、保育者の実践した保育活動を経験した子どもたちが、その後、自主的・自発的な遊びの中でからだを動かすことをどのように体現しているかについて記録したものである。

特に、遊びを通した子どもの育ちを探るためには、対象となる子どもの持つ様々な状況理解が必要であると考えた。

そこで、項目【背景】を設け、観察対象となる子どものこれまでの発達や人間関係等について記述していくこととした。さらに、子どもの姿を捉える方法として、鯨岡(2005)のエピソード記述法を用い、保育者自身が感じ取った場面、心が揺さぶられた場面を描きながら、一人ひとりの子どもをより主体として受け止めていくことができるよう提案した<sup>5)</sup>。報告書の様式は9項目で構成した(図5)。

からだを動かす遊びの報告書 No.		
観察園【 保育園】 実施者氏名( )		
観察日時		観察対象児 及び人数
主な遊び (運動能力)		観察場所
【背景】		
時間	活動内容 (写真・図)	子どもの姿
【反省・評価】		

図5 からだを動かす遊びの記録報告書様式(著者作成)

### 4-3. 研究指導③

- 平成 26 年 8 月～平成 27 年 2 月 年齢別部会での事例報告会開催を提案する。
- ・ 毎月に提出された報告書を基に、他園の保育者同士で意見交換を行う場を提供する。
- ・ U市保育士研修会「記録の振り返り」の講話による研修を行う。

#### 4-3-1. 事例報告会を通じた対話 (Check ①)

毎月に提出された各園の報告書を基に、U市の年齢別部会を活用した事例報告会の開催を提案した。1年間に渡る慣れない研究活動は、多忙な保育者にとって負担となると考え、研究活動への継続的な姿勢を育む一つの方法として、他園の保育者同士が意見を交わす機会を保障することとした。さらに、事例報告会での対話を通じた保育者の意識変容も視野に入れた会の運営方法を研究委員に提案した。

また、保育づくりの省察を深めるために報告書の提出が2回終わった時点で、「記録の振り返り」の講話を行った。

#### 4-3-2. 保育者の意識変容 ステージⅢ

事例報告会で他の保育者の保育実践報告書に触れ、参加者の中には「自分の保育実践がこれでいいのか分からない」「何に焦点をあてて取り組めばよいのか分からなくなった」という自身のつくる保育活動への不安や迷いの声があがるようになった。これは、他者との対話を通じた振り返りの発言であると捉えた。

そこで、研究の2本柱である子どもの育ちと保育者の育ちについて、提出された報告書に当てはめながら解説を行い、保育者それぞれが取り組むべき保育づくりへの焦点を再確認していった (図6)。

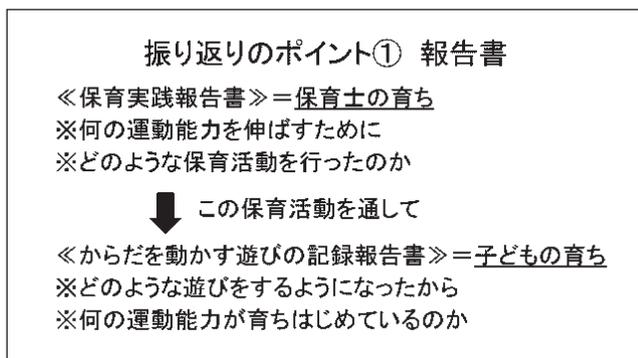


図6 振り返りのポイント①報告書 (著者作成)

### 4-4. 研究指導④

- 平成 27 年 6 月 実践報告会を開催し、1年間の研究のまとめをU支部全体で振り返る。
- ・ 育てたい6つの力を各年齢から1つずつ事例を選び、保育士研修会で保育実践の発表を行う。

#### 4-4-1. 保育者の意識変容 ステージⅣ

事例報告会を通して、自らの担当する年齢の子どもの姿や保育づくりについては理解が進むようになった。そのような中で「他の年齢クラスの保育者がどういった取り組みをおこなっているのか知りたい」「縦の発達のつながりがわかりにくい」といった声があがった。単年齢での横の取り組みから乳幼児期の一貫した取り組みのつながりに意識が向かった発言であると捉えた。

そこで、それぞれ担当クラスで行った保育実践だけではなく、年齢毎に実践された保育活動がどのように6年間の子どもの育ちにつながっているのか、その発達のつながりについて理解が深まるよう実践報告会を開催した。

#### 4-4-2. 実践報告会 (Check ②)

1年間の保育実践のまとめとして、育てたい6つの力を各年齢から1つずつ事例を選び、実践を担当した保育者が写真とスライドを用いて口頭発表を行った。

特に、幼児期運動指針では語られなかった乳児期の遊びは、現場保育者のからだを動かす遊びへの理解と保育づくりに至るまでの試行錯誤の結果となるよう報告会の内容を構成し、さらに、そうした乳児期のからだの動きがその後の幼児期の発達へどのように昇華されていくのかについてスライドを用いて解説を行った (図7)。

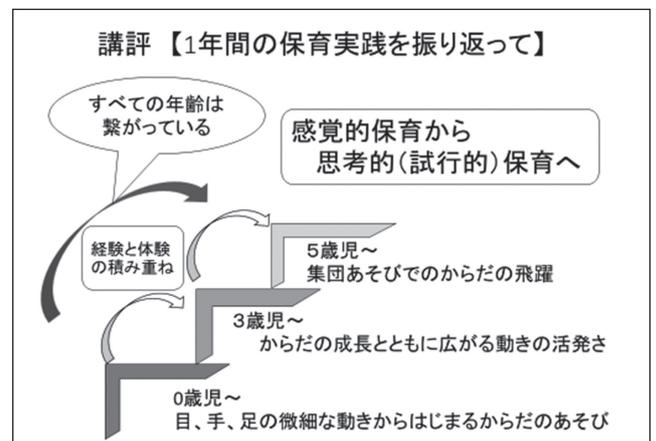


図7 1年間の保育実践を振り返って (著者作成)

4-5. 研究指導⑤

○平成 27 年 7 月～9 月 モデリング作成及び研究のまとめを行う。

- ・各年齢担当の研究委員は、提出された保育実践報告書から育てたい 6 つの力ごとの事例を選び、モデリングを作成する。
- ・研究事務局委員と発表担当保育者、そして研究指導者の三者で研究のまとめと今後の課題を検討していく。

4-5-1. モデリング作成 (Action)

からだを動かす年間指導計画 (P) に基づいた、保育実践報告書及びからだを動かす遊びの記録報告書 (D) による保育づくりの視点の意識化、さらに事例報告会や実践報告会 (C) を通した振り返りによる気づきや評価、これらを次の保育づくりへ高めていくためには保育活動の改善 (A) が必要となる。

そこで、保育づくりで感じたことや気づきを盛り込みながら、各年齢に適した遊びを発達段階毎に提示し、U 支部独自のモデリング作成を提案した。そして、この作成を通した保育者の学び、つまりは自らの保育づくりへの意識化を行うこととした。モデリングの様式は、17 項目で構成した (図 8)。

話による意識確認が図られた。さらに、「遊びの事例名だけではその保育活動のからだの動きがわかりにくい」という声があがった。これは、このモデリング作成を通してどう保育づくりに活用していくのかという改善に対する発言であると捉えた。

そこで、選ばれた事例の活動内容に即したからだの動きを明記することにした。

5. 考察

本研究は、保育の質を高めるための研究指導のあり方を探るために保育者の意識変容に焦点をあて、A 県保育大会に向けた U 支部の研究指導を行ってきた。

保育の質は、「構造の質」「過程の質」「成果の質」の 3 つの点から捉えることができる。中でも「日々の保育実践の中で」保育者が子どもとの関わりを通した生活をどのようにつくるのかという「過程の質」を高めることによって、「結果として子どもの育ちをどのように捉え評価して考えていくか」という「成果の質」につながると考えられる<sup>6)</sup>。(秋田：2011：94)

秋田 (2011) の述べる通り、保育の「成果の質」は、保育づくりの「過程」を高めることにある。本研究の目的である研究指導のあり方とは、まさに保育の「成果」に向けた「過程」を高める試みであったと言える。

今回の研究指導は 5 段階の構成となり、段階毎に保育者との「過程」を対話によって進めていった。

指導計画 (P) の作成では、29 園の研究目的を統一するために年齢毎の計画を立案した。しかし、それぞれ園の環境や状況が異なる中で、立案された計画がどのように活用されたのかまでは振り返りに盛り込むことができなかった。

保育実践 (D) では、各園の保育実践を公開して観察していくことは時間的にも困難であったため、報告書という記述で書き留めていくことにした。通常の保育記録に加えた業務となったため、保育者の負担となったことは想像に難くない。しかし、その報告書の記述内容は、保育者の現状を把握するよい省察の材料となり、その後の振り返りに活用することができるものになった。

そして振り返り (C) では、前述の報告書を活用した事例報告会の場をつくり、日頃は意見を交わす機会が少ない他園の保育者と対話することを通して、他者対話と自己対話による省察を目指した。平日の保育が終了した後の開催にも関わらず、全 6 回の開催日に

期	I 期 (4.5 月)	
発達段階	・全身のバランス力、体の動きが巧みになる。 ・新しい環境に親しみをもち、様々な活動に興味、関心を持つ。	
子どもの姿	・進級に喜びを感じる反面、不安そうな表情で登園する。 ・友達や新しい生活に期待を寄せながら、好きな遊びを見つけて楽しむ。	
個の遊び からだを動かす遊び	バランス	【ぐるぐるじゃんけん】ラインに沿って走る
	体の移動	【フラフープ跳び】リズムをとりながら跳ぶ
	物の操作	【ボール遊び】投げる、転がす
	力の入れ方	【鉄棒遊び】ぶら下がる
	体のやわらかさ	【マット運動】両手をついて回る
	つづけて動く	【フープをつなげたよ】フープを並べて跳ぶ
	バランス	【新聞を使って遊ぼう】頭にのせて片足立ち
	体の移動	【リズムに合わせてなりきり遊び】跳びはねる、寝転がる
	物の操作	【ボール遊び】投げる・捕る・転がす
	力の入れ方	【ふれあい遊び】柔軟体操
集団の遊び	体のやわらかさ	【マットを使ってサーキット】前転、ジグザグ跳び等
	つづけて動く	【おにごっこ】走る
	☆保育士の援助	☆一人ひとりの思いをくみ取りながら信頼関係を築き、安定して遊べるようにする。 ☆保育者も一緒に体を動かしたり、遊びに加わったりして、楽しさを共有していく。
◎環境構成	◎遊具や用具の使い方を知らせ、安全に遊びを楽しめるよう配慮する。 ◎子どもの様子を観察し、新しいことにも興味を持てるよう適した遊具や用具を準備する。	

図 8 4 歳児からだを動かす遊び年間モデリングから一部抜粋 (A 県保育大会発表資料より)

4-5-2. 保育者の意識変容 ステージ V

特に、項目【からだを動かす遊び】については、提出された各園の報告書から、より発達段階に適した保育活動を選出する作業となるため、担当委員同士の対

200人を超える保育者の参加があったことから対話による振り返りを保育者自身が求めていたことが窺えた。

最後に改善（A）では、次の活動につなげることを目的に、自らの研究成果をモデリングとして作成した。提出された報告書は、何百枚という数にのぼり、各年齢の子どもに合わせた遊びを選ぶ作業は、大変な労力となった。しかしながら、からだを動かす遊びを通じた研究過程を経て、担当委員の間では対話による選定が行われていった。

モデリング作成は、U支部全体の保育者ではなく、各園の研究委員による作成であったため、全体としての保育者の意識変容がどのように見られたかは、提出された報告書の記述内容から今後探る必要がある。

しかしながら、計画から改善までの一連の研究活動を通して、保育づくりに対する現場保育者の意識化された発言があったことは確かである。

保育者自身が自らの保育のあり方を見つめ直し、次の保育づくりへ振り返りを活かしていくためには、記述を用いた対話による振り返りの場づくりを組み込んだ研究方法、つまりは研究指導が重要になってくると考えられる。

## 6. おわりに

本来、日々の保育を省察し、改善していく園内研修の取り組み方は、通常の業務内で実施されることが望ましいと考える。しかしながら、待機児童問題、保育者不足等、保育現場は目の前のすべきことに追われる中で、子どもの姿や遊びを見つめ、自らの保育を日々振り返り、保育の質を高め続けるために、多くの研修時間と労力が必要になると言える。

そうした状況において、保育者が日々の保育をつくりながら、同時に自らの省察を行うことができる時間と場を保障していくことは、今後の保育現場の課題であり、協働で研究に取り組む保育研究者の課題でもある。

本研究で対話した多くの現場保育者の声、それは、多くの責務を背負いながらも、目の前の子どもの成長と発達を自らの保育活動に織り込み、限られた時間の中で振り返りを行おうと試行錯誤する姿であった。

今回は、U支部に所属する29園の協同研究であったため、それぞれの園の状況に合わせた研究の取り組み方であったとは言えない。今後は、保育者の思いに

寄り添いながら、限られた体制、限られた時間の中でも、保育者自身が自らの保育づくりを楽しみながら実践し、振り返りを行う研修プログラムの構築と保育研究者と保育者との協働体制を確立していく必要があると考える。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、A県保育大会に向けた研究指導に携わる機会を与えてくださいましたU支部保育連盟及び保育士会の皆様はじめ、3年間の研究活動を一緒に過ごす機会を下さいました各園の先生方皆様に心より感謝申し上げます。

## 7. 引用・参考文献

- 1) 川崎徳子：保育における振り返りと記述することについて 実践に生きる保育者の研修を考える、山口大学教育学部研究論叢(第3部)－芸術・体育・教育・心理－, 65, 35-51, 2016.
- 2) 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子：保育の質研究の展望と課題、東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 289-305, 2007.
- 3) 文部科学省：幼児期運動指針, 2, 2014.
- 4) 山口県学校安全・体育課: チャレンジやまぐち家庭・地域・学校で楽しく取り組むプログラム, <http://www.pref.yamaguchi.jp/cms/a50500/chareyama/chareyamapuro.html>, 2016年12月1日.
- 5) 鯨岡俊：エピソード記述入門, 東京大学出版会, 2005.
- 6) 秋田喜代美監修・松山益代著：参加型園内研修のすすめ－学び合いの「場づくり」－, 94, 株式会社ぎょうせい, 2011.